

P10-142

当院におけるAEDの管理方法

名古屋第二赤十字病院 臨床工学科

○水野 雄介、山田 悌士、藺田 誠、東 和美、
杉浦 裕之、江向 光希子、新居 優貴、相原 有理、
西尾 祐司、豊田 絵里、重野 高儀、五藤 輝彦

【背景】当院は2005年9月から自動体外除細動器（以下AED）を導入し、現在までに各病棟に17台、外来、その他の場所に3台を設置した。

【使用状況】2005年9月～2010年5月におけるAED使用状況は38例であり、病棟で35例、外来が3例であった。また、除細動を行ったのは12例、心拍再開は45%であった。

【管理方法】AEDの設置は救急外来を除き、専用のケースに収納されており、病棟設置分はその病棟が、外来設置分は警備員が1日に一度、AEDのインジケーターを確認している。AED使用後は使用部署がAED使用報告書を作成し、看護部、医療機器管理センター（以下ME）に提出し、MEでは使用後の点検および定期点検、使用記録の解析と保存、消耗品の補充を行っている。使用記録は専用ソフトでデータベース化しており、バッテリーは使用回数、充電回数によって残量を計算し、交換を行っている。

【問題点】部署により使用頻度が異なり、消耗品の管理に工夫が必要である。特に通電パッドは使用期限によって配置場所の変更を行っているが、高い効果は望めないのが現状である。また、開封して使用しなかった通電パッドがそのままAEDに入っていたり、AED収納ケースのバッテリーアラームをAEDのアラームと混同してしまうなど、さらなる教育の強化が必要である。

【結語】AEDは救命処置を行ううえで重要な機器であり、日頃からの整備、点検が重要になってくる。そのうえでMEが果たすべき役割は大きく、いつでも正しく安全に使用できる環境を作り、医師や看護師、その他の医療従事者と協調し、さらにより良い環境を作り出すことが重要であると考えられる。

P10-144

「Fish」から伝える赤十字職員の和 ～社会課の取り組み～

岡山赤十字病院 社会課

○武久 真輔、石井 史子、大山 護、三好 美和、
久村 和史

【目的】当院は、毎年管理者研修会を開催しており、今年度の研修内容は主として「Fish」哲学であった。研修後、社会課において「Fish」哲学を導入し、活性化を図るべく業務に取り組んでいるので、その内容及び効果について報告する。

【内容】「Fish」哲学には、1.仕事を楽しむ2.お客様（相手）を楽しませる3.お客様（相手）に向き合う4.態度を選ぶという基本コンセプトがあり、これらを取り入れてみた。また、物事に対する考え方の変換（パラダイムシフト）も必要であり、今まで「当然」と思っていたことを違う角度から捉えることを意識づけた。1.ドアへの顔写真入りポスターの掲示当課は訪問者が比較的少なく、存在すら知らない職員もいるため、事務室ドアに顔写真入りポスターを掲示し、アピール及び当課職員を知ってもらうようにした。2.病院理念の唱和と社会課「課訓」の設定当院は何を目的として業務を遂行しているのか、また、社会課は目的のどの部分を担っているのかを明確にすることが仕事を楽しくするために重要であると考えた。3.週目標の設定及び評価仕事だけではなく個人的な目標も含め、課内で共有しようという目的。金曜日には1週間の評価をしている。

【効果】コンセプトの導入により、課員にパラダイムシフトが浸透し、仕事に対し楽しんで取り組む姿勢や工夫が見られ、態度を選ぶことで訪問者への接し方にも変化が現れた。また、課内において情報を共有することができ、相互にコーチし合うことができていた。

【まとめ】職員間の風通しが良いことと仕事を楽しくすることは密接に関係しており、その底辺にあるのは自分がどの態度で仕事や人に接していくかである。自分の選ぶ態度ひとつで仕事も楽しくなり、相手を満足させることができることを自覚し、今後も「Fish」を継続していきたい。

P10-143

当院における自動体外式除細動器の使用状況

諏訪赤十字病院 臨床工学技術課¹⁾、救命救急センター²⁾、内科³⁾

○栗原 広兼¹⁾、丸山 朋康¹⁾、宮川 宜之¹⁾、
奥山 隆之¹⁾、筒井 洋^{1,2)}、上條 幸弘²⁾、
矢澤 和虎²⁾、酒井 龍一²⁾、大和 眞史²⁾、小口 寿夫³⁾

【はじめに】2004年7月1日より本邦において非医療従事者による自動体外式除細動器（以下、AED）の使用が認可され、空港や駅といった公共施設にもAEDが広く設置されるようになった。当院でも2004年よりAEDを設置し、現在では各階にAED及びAED機能付き除細動器を設置している。

【目的】当院におけるAEDの使用状況及び、その有効性について検証する。

【方法】2005年7月から2009年5月までに発生したAED使用症例について検証する。検証項目は、AED使用症例数・AED使用時の波形・除細動症例数・心拍再開数・一ヶ月生存率とした。

【結果】AED使用症例は31例であった。心室細動及び心室頻拍症例に使用したのは14例であった。除細動施行症例は12例あり、除細動後に心拍再開した症例が7例、内一ヶ月生存した症例は5例（16.1%）であった。除細動施行症例は全体の38.7%を占めた。病院内の心肺停止症例は無脈性電気活動や心静止が多く、除細動適応波形に変化した場合すぐに対応できるようにAEDを使用しているケースが多かった。心室細動及び心室頻拍症例で除細動されなかった症例が2例あった。1例は解析時、心室細動であったが除細動施行直前に徐脈に変化したためキャンセルされた症例であった。2例目は心室頻拍症例であった。

【考察】各階にAED及びAED機能付き除細動器が設置され早期除細動が実現でき、その結果として一ヶ月生存率も16.1%と市中のデータと比べて高率である。今後の検討課題として、心肺蘇生の実施状況など詳細な検証が救命率向上のため必要である。

P10-145

災害時における調剤薬局との連携について

京都第一赤十字病院 医療社会事業部

○上門 充、高階 謙一郎、柿本 雅彦、船越 真理

【はじめに】以前、「災害時における院内患者の意識調査」を行い、基幹災害医療センターである当院が災害時に多数傷病者の受け入れ対応を行う事に対する入院及び外来患者の意識調査を行った。その際、外来患者の37%が当日処方を希望するという結果がでた。当院の外来処方、ほとんど院外処方となっていることから、災害時における外来患者ニーズを満たす為に、調剤薬局とどのような連携が出来るのかを検証するため、調剤薬局に対する意識調査を行った。

【方法】京都府薬剤師会の会員760名を対象に、自記式アンケート調査を行った。質問は、属性、基幹災害医療センターについて、所属組織の災害対応についての3点に絞って行った。

【結果】有効回答は、379件であった。所属については、97%が調剤薬局勤務であった。また、薬剤の災害用備蓄について、「ある」が11件（2.9%）「なし」が343件（90.5%）であった。緊急召集体制（夜間含む）の有無については、「整備済み」が63件（16.6%）「未整備」が200件（52.8%）であった。近隣の医療機関と災害時の連携体制（契約や申合せ事項）の有無については、「ある」が6件（1.6%）「なし」が288件（76.0%）であった。

【考察】現在、多くの病院が、院外処方を行っていることから、災害時における調剤薬局との連携は不可欠である。今後は、近隣の調剤薬局との災害時の連携方法を検討し、定期的実施している災害対応訓練及び研修会の中にも、調剤薬局との連携を踏まえた内容を盛り込むなど、具体的な協力関係を関係機関も交えて、検討して行く事が必要と考える。